

## 令和3年度「日田市農業振興ビジョン」第3回推進委員会議事録

R4. 1. 14(金) 10:00~12:00

庁議室

### 1. 開会（事務局）

### 2. 委員長挨拶

### 3. 議題

#### （1）見直し内容について

##### ①主要・重点施策

##### ②目標指標（KPI）

（事務局）資料1および資料2にて説明

### 意見集約

#### 1)

ビジョンの最終的な目標は農家の所得向上だと考えるが、市の農地面積の大部分を占める水稻の価格が下落している。米価をあげないことには日田市農業はなかなか発展していかないと思う。例えば宇佐市がコメ農家への支援を展開しているが、このあたりを事務局としてどう考えているか伺いたい。

### 事務局）

宇佐市がコロナの臨時交付金を活用し、米価下落に対する支援ということで、一反あたり4,000円の予算措置をしている。全国的に、米どころの地域では同じような施策を出しているところもある。県内では宇佐市が水稻の面積が広く、助成金の総額は1億3,000万円程になると聞いている。日田市の場合、宇佐市と同様の金額で試算すると約1,800万円が必要になり、市の財政的に補填することはできないと考えている。市内にコメ農家が多くいることは理解しているが、米の消費が減少している中で、米で農業所得をあげていくことは大規模農家でないと難しいと考えている。米だけではなく他の農産物も含めた生産額を増やしていきたいということを基本に考えていかなければいけないため、水田畑地化による高収益作物への転換の観点で考えていきたい。

国の食料農業農村基本計画の中では、国内の食料自給率減少の要因としては、米のように本来国内の生産能力が高いものを日本人が消費せずに、海外に委ねた部分の消費が増えていることを指摘されており、そういったニーズを捉えた生産をしていくことが重要だと謳われている。このような流れの中で、水田畑地化や、高収益作物への転換という観点を国・県も重視しており、日田市においても目指すべきはそういう部分だと考えている。

2)

米に関して、昨年酒造会社から酒米生産の提案があった。通常の米の3倍の単価で購入するということがあったが、栽培が非常に難しく断った。上手につくれば、相当反収もあがると思うので、自分はできなかったが、ほかに周知できる農家があったら、お願いしてみたい。

3)

酒米に関して、大鶴地区でも酒造会社の依頼で盛んに作った時期があるが、丈が高く倒れやすいため作りにくかった。単価は確かに高いが、作りにくいということと、経営安定化のためには大量に作る必要で、ライスセンター等と連携した供給体制を整えるなど、産地としてまとめていかなければ実現は難しいと感じている。

4)

ビジョンを見ると、水田のほ場整備が今後も進んでいく見通しである。水田畑地化の考えもあるようなので、畑地化エリアを見込んだ形で整備したらどうか。畑地化の場合、排水の問題があるので、これを見越したほ場整備事業を地元と協働で続けていただきたい。

5)

大肥郷では、ほ場整備した農地で排水対策をしながら、米に代わる作物として大豆・麦を積極的に作っている。大豆・麦の国内自給率が低いため、国も国内生産を拡大しようとするめているが、日田では大肥郷でしか生産が広がっていない状況。今、ほ場整備している地域については、面積の30%は畑作をするよう求められているが、大豆・麦は排水対策さえすれば生産できるが、手のかかる野菜は大々的につくれない。毎日収穫するような作物は難しいため、甘しょや白ネギの栽培に取り組もうと思っている。大豆・麦・甘しょのような個別の振興作物についてはビジョンに書かれていない。いずれにしても農家所得の向上を図るという観点で、日田市の生産額をどの程度上げていくかをビジョンで示せるといいと思う。もう一つは経営体の減少というのが非常に懸念されるので、このあたりを組み込んでもらいたい。

#### 事務局)

ほ場整備を進める中で、補助事業の関係で30%は畑地化を求められており、適した作物の導入などについて、地域を担う集落営農法人をはじめ地元の方々と一緒に話し合いを進めていきたい。畑地化して作物を作る場合、米に比べて人手が必要となり、集落営農法人による雇用など担い手の確保の問題も出てくる。ビジョンの重点施策にも示しているが、ほ場整備が終わって、畑地化ができるような地域とも連携しながら、県農協が主体となって新たに就農学校を作るということも考えている。

品目ごとの数字については、甘しょについては挙げていないが、白ネギ等については令和9年度までの目標数値を挙げています。また、個別計画としては将来の目標面積を出し合わせ、生産者のアンケートをもとに園芸産地づくり計画の策定をすすめている。これを元に今後、生産振興を図っていくため、その中で個別に協議させていただきたい。

## 6)

今、県が実施しているほ場整備は、畑地化に特化して進めていこうという大前提がある。例えば今進めている天瀬の杉河内地区のほ場整備は、フォアスという方式でパイプラインと排水とを両方兼用する仕組みを作っている。杉河内ではニンニクを黒ニンニクに加工する機械を導入する取組などが行われており、このように、地域ごとに適した作物を見つけていただきたい。また今後推進していくなかでも、土壌改良など、畑地化に必要なことでほ場整備でできるものは、ほぼ全て対応していきたいと考えている。県では今まで水田のほ場整備しか経験がないので、基本は深さが15cmという固定観念がある。作物ごとに適した深さなどについては経験値が乏しい。今後、地元の担い手の意見を聞きながら軸を固めていきたい。作物を作るだけでなく人をどうやって仕組んでいくかといったところも含めて、是非、情報交換させていただきたいと思う。

## 7)

ビジョン重点施策1「担い手をサポートする体制の整備」について。

大山町農協については、法人を作りながら対策をとっているが、県農協ではもう少しサポートをしてほしい。いま、地域農業は様々なサポートを求めている。新規就農をはじめ機械の関係や土壌診断などについて、農協職員の指導体制も十分でないという声を聞いていることから、もう一步踏み込んだ形のサポート体制を作り、集落営農法人ができなくても、県や農協が一体となって農家を指導したり相談出来る支援をしていかなければ、今後さらに厳しい状況になると思う。

## 8)

県農協の出資型法人については以前から検討してきたが、西部地区や日田地区だけの法人設立は難しい状況であり、違う形で担い手をサポートするという考えのもと、就農学校の設立を挙げている。県農協管内ではピーマンや白ネギ、花きなど様々な品目があるが、就農する前の研修施設を作ってスムーズに就農できるような形のサポートをしていきたいと考えている。作業委託については、今回農協が合併した中で、玖珠・九重が水稻の育苗を行っており、一部、日田市管内の農家も育苗を委託されているので、日田でも出来たらと考えている。

農協による相談・サポート体制としては、営農を中心に進めているが、指導員や職員不足で十分対応できていない。来年度10月には営農センター構想という形で、より強く営農に

特化した体制を組んでいこうという考えがあるので、その中で農協としての指導体制を構築していきたい。

9)

大山町農協は小さな農協なので、小回りのきく施策が出来るという利点がある。大山地区でもかなりの高齢化が進む中で、もう少し高齢者に頑張ってもらおうという施策で、地域集落文産農場を作った。山間部には沢山の集落があって、まだまだ元気な高齢者がいるのに、運転免許返納などの問題もあり農産物の出荷ができないため、文産農場で生産力の確保および高齢者の生きがい対策をしていく考えである。もう一つは新規就農者の確保。遊休地や荒廃地を農協が買い上げ、新植・改植して新規就農者などの担い手に将来的に受け渡すという様な形で、農協が運営していこうという考えがある。まだ始まったばかりだが、実現に向けて頑張っていこうと考えている。

事務局)

県の総合戦略会議で示された施策の一つに、営農指導強化の部分があるが、その中で大山農協では独自にベテラン農家を営農指導体制に組み込んでるという取組がある。他の農協も含めて、職員数が減少していくということと、営農指導に特化した人が中々入ってこないという問題もあって、ベテラン農家を活用した指導体制を構築していく必要があるのではないかという観点である。県農協についても、営農指導体制の構築が来年の10月迄に示されるという話なので、そういった取組について、私たちも注視していきたいと考えている。

10)

昨年の日田の野菜は全般的に安かったため、危機的な状況だと認識している。ビジョンの中で最終的に目指すべきは農家の所得向上だと思っているので、事務局もそういったことを念頭において、やっていただきたい。

11)

野菜の価格について。白菜に関しては、今シーズンは安かった。日田はちょうど栽培の時期に雨が降らなかったため、収量もとれておらず、尚更きつかった。いま日田産白菜は底値であるという印象。

一方で、価格も安定して普通に販売できている産地も沢山ある。私が最近思うのは、なんの戦略もないまま、新しい作物を取り入れたところで、何を作っても結局一緒だなと感じる。以前、梨を栽培していた頃に東京・大阪・台湾などに販売促進に行ったが、消費者は地域の名前で買って、品質は消費者にはわからない。熊本県産、長野県産の野菜から先になくなっていく印象だった。日田もそういう産地にしたいと思っていて、西部管内で一つにまとまろうという動きの必要性を感じている。日田も玖珠も九重も、県西部にある小さな町であ

り、魅力はほぼ一致している。ここが協力して新しいブランドイメージをつかって、これをもとに、優秀な作物を作る人が集合していくことが必要。また、農業だけでなく、日田はジビエ・小鹿田・日田下駄・林業などの魅力もあるので、他分野の人たちとも協力して、全国の人々の目を日田地域に集められるような大きな取組をすることが自分の理想。そういう取組を継続して一気に進めていきたいと考えている。

## 12)

今シーズンの野菜単価が上がらなかったという事で、先ほどから話を聞いていると、知名度の部分もあるだろうが、本質的な課題はどういうところなのか。農業だけでなく、観光や林業もおそらく同じような課題を抱えていると思う。日田市の産業全てにおいて、解決の糸口は共通しているような気がしてならない。それが一番目に見えるのが第一産業であり、特に農業。「食」は人間にとって非常に大事なところなので、その仕組の部分があれば詳しく教えて頂きたい。

## 13)

野菜に関していえば、大分県は小規模地域でのブランド化は色々なところでやっているが、県全体での大きな戦略があまりなかった。日本は自由で、どこで何を栽培してもいいし、自由に売ってもいい。しかし大きく商売をしようと考えたら損で、中国のように、この地域は何を作るのに向いているので、これを作りなさい、といったやり方のほうが、本当はいいのではないかと個人的に思う。自由に何でも作れて、それを自分達で出すというやり方では単価がつかない。ある程度価格保証をさせようと思ったら、地域として沢山作って、それを確実に1個の市場などに、年間これくらいの量を出せませうという約束をして、それを確実に出すというように、大きな産地がしているようなことをすれば、野菜であれば一定の単価は保証されやすいのかなという印象はある。日田の白菜は他の産地に比べたら、大した量ではない。他の野菜もそうだと思う。県が推進している白ネギは100億円までもっていけばトップレベルになるので、そういう試みはすごく良いと思う。

## 14)

やはり量と品質。大分県では甘しょを「甘太くん」という全国ブランドで展開していて、他の産地に勝る勢い。産地間競争で、今後は農協の部会がいかに戦略を立てて、卸業者から直接注文があって、生産者が単価を決められるような市場との取引ができるようになって初めてブランド化されていく。市場に対応できるような量があり、いいものを作る産地を育てていくことと、売り込み・駆け引きできるような体制をとっていくことが重要。市場のいいなりだと負けてしまう。

## 15)

例えば日田の一つの事例でいくと、大山町農協が少量多品目の生産と木の花ガルテンの展開等で歴史を刻んでいる。その原点にあるのは、大山の土地柄的に梅・栗が適しているのではないかということで、これを推奨して現在まで至っているような部分。実際ブランディングというのは、現在進行形で進んでいるものでないといけないと思っている。量で他に負けるのであれば、量ではないところでやらないと、強い農業は出来ないと思う。耶馬渓では有機農業に真剣に取り組んでおり、独自の他のエリアではできない事をリサーチしてやっていて、九州内でも無農薬を好きな方のニーズに向けての戦略を展開し、その方々にとって有名な産地になっている。

観光の視点でみると、日田は梨しかイメージがない。スイカや白菜は地元の人や業界関係の人くらいしか分からないのでは。消費者ニーズのどの部分をターゲットにするかが明確になっていないから、結局ブランディングもできない。ブランドイメージは量の問題ではない様な気がしていて、生産者自らがどういう農業をやるんだということを、これだけ情報を与えられている中で、ある程度議論していくべきだと考える。

ビジョンには、重点施策をかなり広い視点で書いている。これを受けた上で、あとは農家自身がどこに・誰に・どういうものを売っていくのかをリサーチしながらやるべきである。

現代は個性的でなければ中々イメージが広がらない。かなり尖ってやらないと、誰にも届かない。大山町の「梅栗植えてハワイにいこう」という部分は未だにみんな知っている。やはりそういうところが大事だと思う。本質的な狙うところに関しては、まだまだ尖っていく必要があるのではないかと、第三者の視点として思う。

## 16)

農産物のブランド化戦略の一つとして、市で取り組み始めているのが、まずは果物・野菜のトップブランドを作ろうということ。福岡市場に対して、トップブランドで日田を認知いただけるような方法として高級ギフトの展開を今年から取組をはじめており、そういった品目を広げていければと考えている。これがブランド作りに繋がると考えているので、ご協力をお願いしたい。

## 17)

重点施策2「循環型農業」の部分で堆肥の話が出ている。堆肥が発生する地域と堆肥を必要とする地域が非常に離れているという問題があり、県では、それを解決するために国の農研機構が開発したペレット堆肥の活用を考えている。流通する上では非常に効果的であり、散布方法も、従来はマニアスプレッダといった専用の機械が必要だったが、ペレットにすることで、通常の肥料を散布する機械で対応が可能であり、効率的に耕畜連携が図れるということで、県でも進めている。

しかし、ペレットにも課題があり、耕種農家が強く求めている土壌改良の点では通常の堆肥に劣るという欠点がある。従って、ペレットと併せて、通常の堆肥もセットで流通していくことが重要。幸い、日田は畜産地帯であり堆肥が豊富にあるので、色々な形で利用が可能と考えており、県も一緒に取組を進めていきたい。

#### 18)

堆肥を撒きたくても撒けない農家が多い中で、ペレットは非常に有効ではあるが、散布する主な目的は土壌改良にある。認定農業者の会でも議論したが、散布する機械の貸し出しや、人手の確保が課題である。家族経営の酪農家が多いのであれば、堆肥の生産・運搬・散布作業まで一貫した体制を作ってもらえると、域内でもかなり需要があると思う。例えば梨農家は、20年くらい前までは反当り2トン以上の堆肥を入れていたが、ここ最近は機械や人手の事情で入れてない。これが解決されれば、市内でもかなりの需要があるので、これを施策の中に盛り込んでいただきたい。

#### 事務局)

日田市は酪農地帯であるため、生産された堆肥をしっかりと使わなければ、環境の問題にもつながってくるということで、うまく循環させたい考えがある。これまでも、堆肥を散布する補助事業を継続して取り組んできたが、補助金があっても、散布するタイミングが合わない・機械がないなどの意見があると思うので、ここを解決するような施策を取り入れていきたいと考えている。堆肥の補助事業も、需要があれば本来は実績が上がっていくと思うが、実際には上がっていないし、要望も増えていないという現状があり、この部分が、市としても農家の需要に十分お答えできていないところだと感じている。集落営農組織から、散布機械の貸し出しの要望なども上がっているので、機械の支援も含めて、農家の方からご意見をいただきながら進めていきたい。

また、広域流通のテストとして堆肥を宇佐に持って行ったことがあるが、うまく循環できるという感触があった。域内のニーズにもしっかりと対応し、なおかつ溢れるようであれば、県内への流通も考えていきたい。そして畜産ふん尿などの廃棄物も、資源であるというところをしっかりと認識して施策を進めていきたいと考えている。

#### 4. その他

#### 5. 閉会（事務局）